

ひょうご 水百景

No.4-2 逆瀬川（宝塚市野上・逆瀬川）

～わが国初の流路工・今はミヤマアカネの楽園～



写真-1 菜切橋から逆瀬川中流部の流路工を撮影（平成 23 年 8 月）

■ わが国初の流路工、「逆瀬川砂漠」は一大住宅地に

逆瀬川源流部で実施された山腹工事や砂防堰堤などの発生源対策は一定の成果を上げましたが、中下流部における土砂移動は依然として治まらず、明治・大正期の逆瀬川は川幅が 200～300m もあり、「逆瀬川砂漠」と呼ばれていました（写真-2）。

このため、内務省の砂防技術者であった**赤木正雄**博士（豊岡市出身）の指導により、縦横侵食を防ぎ川筋を固定するためわが国初の流路工が計画・設計され、昭和 3（1928）年から昭和 9（1934）年にかけて工事が行われました。

この流路工（写真-1・3）は、床固工と護岸を組み合わせたもので、この工事により「逆瀬川砂漠」と呼ばれた広大な河川敷は 18m の川幅となり、河道も安定しました。

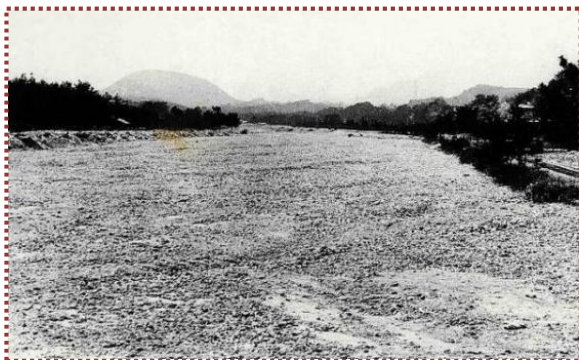


写真-2 昭和 3 年 阪急逆瀬川駅付近から上流を望む（兵庫県砂防課提供）



写真-3 流路工施工後の逆瀬川（兵庫県砂防課提供）



図-1 明治20年頃の逆瀬川流域の崩壊地の状況

明治20(1887)年の逆瀬川源流域(図-1)を見ると至る所に崩壊地があり、そこから流出する土砂が下流に運ばれて、逆瀬川下流部および武庫川本川に堆積しているのがよくわかります。

川筋を流路工で固定した結果両岸にできた20,061坪の廃川敷は売却され、住宅地として生まれ変わりました。今の野上地区です。なお、廃川敷の売却益は砂防工事の費用に充当されたそうです。



図-2 逆瀬川流路工周辺の地図

■ 逆瀬川流路工を指導した砂防の神様～赤木正雄博士

わが国初の流路工を指導した赤木正雄博士は豊岡市の生まれ。豊岡中学校を経て第一高等学校に進学、校長の新渡戸稲造の訓話「わが国は度々の水害で多くの人命を失い、家を流し、耕地を荒し、莫大な被害を受ける有様である。(中略)思うに治水は決してはなばなしい仕事ではない。極めて地味な働きである。しかし人生は表に立って活躍するばかりが決して最善ではない。よって誰か諸君のうち一人でも一生を治水に捧げて、毎年襲来するこの水害をなくすことに志を立てるものはないか」を聴き、自らの人生を治水に捧げる決意をしました。

大正 3 (1914) 年に東京帝国大学 (現・東京大学) の農学部林学科に進み、卒業すると内務省治水局に入省、吉野川・信濃川・木津川などの治水工事を指揮する傍ら、オーストリアに留学して治水・砂防技術を学びました。昭和 6 (1931) 年立山の砂防に挑み、阪神大水害復興に伴う六甲山系の砂防工事を指揮するなど、わが国砂防技術の基礎を築きました。

写真-4 は、豊岡市塩津町の円山川河畔 (円山大橋左岸下流) に立つ赤木博士の銅像です。登山靴を履き、リュックサックを背負い、ピッケルを手にした像がいかにも現場第一主義を貫いた博士らしい。

銅像の台座裏には上述のような碑文が刻まれています。

戦後の昭和 21 (1946) 年に貴族院議員に勅選、翌昭和 22 (1947) 年の第 1 回参院選にも兵庫県選挙区から当選し、参議院議員を 2 期務めました。

政界を退いた後は砂防協会理事長を務めながら、晩年まで全国の現場に足を運ぶなど精力的に活動しました。

わが国における砂防の重要性をいち早く説き、「SABO」が国際語になるきっかけをつくった人で、「砂防の父」あるいは「砂防の神様」と呼ばれています。

豊岡市の生んだ赤木正雄農学博士は我が国砂防の神とまでいわれていることは、ひとり博士の名誉と栄光にとどまらず但馬の誇りでもある。博士は長い内務省生活を通じ、また貴族院及び参議院議員としての政治的立場からも自ら全国各地に赴いて治水砂防事業の必要性を説かれ、県下では六甲をはじめ、円山川、矢田川水系の砂防並びに円山川改修等に残された業績はまことに大であり、住民ひとしくその恩恵に浴し永久にその功績を讀めるものである。

このたびその偉業と名誉を録するため勲二等瑞宝章授与されたのを機に我等立像建立を企図したところ、博士は自らの業績を毫も意にとめず一高時代の恩師新渡戸先生から「我が国の治水は砂防にある。よってこれに挺身せよ」との教えを生かしたに過ぎないと固く辞退されたが、我等その意を十分諒察できるも博士の功績を後世に伝えその偉業を顕彰することは我等の責務であり博士もその微意を汲み取られ大方のご協力の下に所期の事業を進め博士の信条とされる「先師に答つ」を刻した銅像を建立するにいたった。よって昭和四十年四月十五日博士ご臨席のもとに除幕を行う。



写真-4 赤木正雄博士の銅

銅像の台座裏の碑文

■ 阪神大水害では砂防施設が効果を発揮

昭和 13 (1938) 年 7 月の「阪神大水害」では、表六甲河川で大規模な土石流が発生し、695 名の尊い命が失われましたが、武庫川水系では、逆瀬川、仁川 (にがわ)、太多田川 (おたがわ) 等に約 90 基の砂防堰堤が完成していたことから、大きな被害は免れました。

逆瀬川流域は、上流部の砂防施設が写真-6 のように被災し、中下流の流路も土砂で埋まってしまいました (写真-5) が、表六甲の住吉川や芦屋川などに比べ住宅地の被害ははるかに少なく、砂防施設の効果が再認識されました。



写真-5 阪神大水害時に土砂で埋まった逆瀬川 (兵庫県砂防課提供)

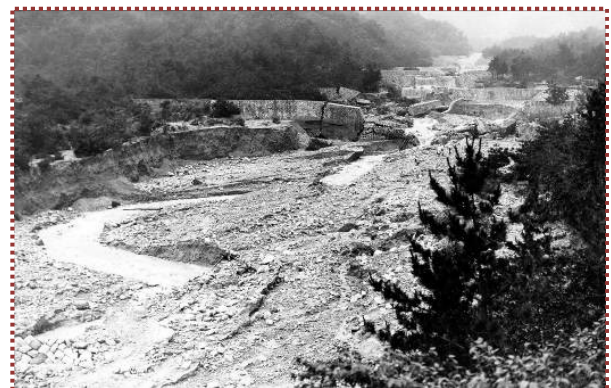


写真-6 阪神大水害で被災した逆瀬川の砂防施設 (兵庫県砂防課提供)

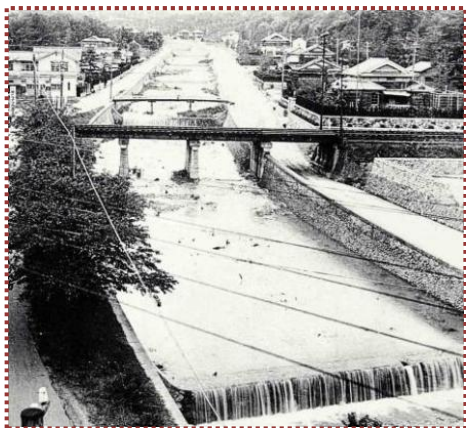


写真-7 逆瀬川流路工（昭和 15 年撮影）（兵庫県砂防課提供）

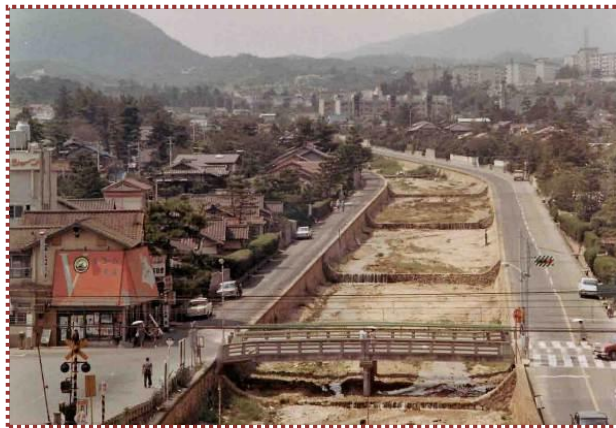


写真-8 昭和 30 年頃の逆瀬川流路工（兵庫県砂防課提供）

■ ミヤマアカネの楽園～逆瀬川流路工

甲山（かぶとやま）を中心とした六甲山系の東端部は県内でも有数のミヤマアカネ生息地で、特に逆瀬川流域にはたくさん生息しています。

本種は、水深が浅く緩やかな流水域を好むことから、流路工によって比較的緩やかな河床勾配となっている逆瀬川は、ミヤマアカネのヤゴの生息に適しているのかもしれませんが。砂防工事によってミヤマアカネが住みやすい新たな環境が創出されたということでしょうか。

漢字では「深山茜」と書きますが、実際には高地に限らず丘陵地から低山地にかけて広く分布し、写真-9～13 のように翅（はね）に茶色の帯があるのが特徴です。

写真-9・10 は、8 月下旬に阪急逆瀬川駅から上流へ歩いて 2 分ほどの河川敷で撮影したものです。10 分程度の中に数十匹のミヤマアカネが確認できました。この時期はまだ未成熟なため雌雄とも体色は黄褐色をしていて、警戒心も弱く、カメラを 50cm くらいまで近づけても逃げません。

9 月になると、成熟した雄は翅脈、縁紋を含め全身が赤化します（写真-11）。警戒心は成熟しても弱く、手で捕まえることができました（もちろん、すぐに放しましたが…）。



写真-9 8月27日のミヤマアカネ



写真-10 8月27日のミヤマアカネ



写真-11 9月12日のミヤマアカネ



写真-12 9月12日のミヤマアカネ

■ モノローグ

写真-13 は、写真-9・10 と同じ日、同じ場所で撮ったものですが、ミヤマアカネがとまっている葉に注目してください。これは芳香のするミントの葉です。ミントは変種が出来やすく 600 種を超えられるほど多種多様な種ですが、これは多分アップルミントだと思います。

ミントは根を横に広げて、新しい芽を出して生息域を拡大していきますが、繁殖力が強く、そのスピードがとても速いため地植えは NG です。実際にミントが生えると土壌の栄養分を大量に消費し、他の植物を駆逐しながら増えていきます。

逆瀬川の河原でもかなりたくさん生えていました。これは平成 23（2011）年に撮った写真なので、今はどうなっているのやら…。



写真-13 ミントの葉で休憩中のミヤマアカネ

【参考資料】

- 1 『砂防の父・赤木正雄～矢野義男氏、「赤木正雄」を語る～』 Media Sabo 10-4
- 2 『砂防一路』 赤木正雄 昭和 38 年
- 3 『宝塚市史・第三巻』 宝塚市史編集専門委員編 昭和 52 年 3 月
- 4 『ミヤマアカネについて』 兵庫県立人と自然の博物館
<https://www.hitohaku.jp/publication/book/miyama2-14.pdf>
- 5 『1.17 忘れへんで 防災教育副読本（小学校編）』 宝塚市教育委員会 平成 9 年 1 月
- 6 『赤木正雄、ミント』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 23（2011）年 9 月 『ひょうご水百景』 No.4

改訂：令和 8（2026）年 4 月 『ひょうご水百景』 No.4-2